

吟
行
句
選
集

仲 磯 浅 飯 釜 加 林 田 佐 光 光
本 目 野 田 田 倉 宮 藤 成
興 健 正 孝 敬 井 半 敦 宏 み 高
正 二 美 三 司 た 寿 子 之 ち 志
け
子

回数	年月日	場所	会場	参加人数
1	2016/7/15	蓮見舟	アビ스타	10
2	2017/5/5	淨真寺練供養	目黒区図書館	12
3	2017/6/17	木下川舟	木下駅前喫茶店	7
4	2017/9/15	駒場	駒場住区センター	12
5	2017/11/30	ゴッホ展	東京文化会館	7
6	2018/4/15	新宿御苑	四谷地域センター	3
7	2018/7/20	蓮見舟	アビ스타	7
8	2018/9/28	中川番所跡	同左会議室	6
9	2019/5/5	蘆花恒春園	愛子夫人旧宅	7
10	2019/5/25	航空公園	璃子宅	3
11	2019/7/19	蓮見舟	アビ스타	5
12	2019/10/4	山種美術館	國學院大學学食	4

手賀沼の水天髪髪虎が雨

菩薩皆黄金色なり練供養

神經ニユ科学の学生に会ひ秋高し

ファンゴツホ此処の銀杏黄葉いかに

ハンカチノキハンカチ広く散り敷ける

日を浴びてO₂の泡を蓮の茎

水澄むや豊かなる水小名木川
音もなく回りつゝ地に竹落葉

青芝に舞台設へ国産機

秋麗やヘレンケラーの撫でし像

光

み
ち

岸辺には救助訓練蓮見舟

果物となぜか手袋ゴツホの絵

着ぶくれて観る花魁のゴツホの絵

梅雨豪雨白布のごとく沼覆ふ

寛永通宝白紙に並べ秋深し

玉堂の溪山は秋人走る

野分来て版木倉庫の窓小さし

ごつごつの蘆花の墓石若楓

よちよちの稚児の渡るや練供養

川鵜飛ぶ進む舳先を横切つて

佐藤宏之助

遊船の行く手を過ぎる川鵜かな
根のことは思はず菱の花を見る

鳥肌が立つほど涼し舟遊び
牧水の歌碑に添ひゆく遊び船

跛の菩薩もゐたり練供養

練供養位牌を胸に橋渡る

土墨よりお練り供養の始終見る

舞妃蓮まだ一片も散らさざる

尺程の片陰に入り煙草のむ

本郷に誓子の母校さくら咲く

田宮敦子

男が作る野外料理や草の花
柔らかいゴツホの筆や小春かな
樺の実や古人を味はへり
蓮見船送電線の弛みをり
愛子夫人のオルガン古び初夏の風
雉鳩や鳩と雀と私達
探梅や福袋乗せベビーカー
青空や福袋乗せベビーカー
蓮の実の何処へ飛びしか本願寺
飛び石をゆつくり渡る石蕗の花

林

半
寿

楸邨の墓は小さし風薰る

練供養中将姫に飴貰ふ

禪堂の板木ひと打秋深む

芥川自死の新聞ぞぞろ寒

薄紅葉塔の四面に時計あり

塩の道てふ川筋に草の花

水の秋定規で引いたやうな川

一枚の画に水の音涼新た

日の大観月の春草秋深む

灯籠に裸電球暮の秋深む

加倉井たけ子

蘆花旧居竹も皮脱ぐ日射かな

走り根や夫妻の墓碑に夏落葉

蘆花・愛子旧居に菩提樹若葉かな

病葉のたゆたふ小名木川遅々と

木斛の実の日を弾く小名木川

釣上げしハゼの胸鰓透き通る

稻荷社に親牛撫で牛豊の秋

奪衣婆の片膝立てる立夏かな

閉ざされし旧屋「禪」の標あり

蜘蛛の糸「稿の朱書の秋澄めり

原色のゴツホの絵画風邪心地

螺鈿のごと重ねし絵具冬灯

鰯飛ぶや水上バスに追わるごと

川二つ交はるところ曼珠沙華

万緑や二十五菩薩来迎す

練供養ひとり泣き出す稚児もゐて

キヤンバスに銀杏落つ音響きけり

鷗外の文字の端正秋さやか

小流に水引草の風立ち初めぬ

この世よりあの世への橋練供養

白鳥にスワンボートに梅雨嵐

梅雨礫ボート百艘叩きづめ

この沼の蓮見の舟にもう会へぬ

学帽の廃るキャンバス秋日傘

秋風や波郷大足大き下駄

ゴツホ展の空鳴きわたら冬鴉

人間も管より成れる象鼻杯

眩暈のアスフルト来て蓮涼し

鵜が杙に翼十字にかつ窄め

眼中の物浮子一つ源五郎

浅野正美

冬夕焼け梢の中に星光る

草むらにひときは紅く水引草

見上げれば銀杏の実鈴なりに

秋空を桜の大樹空覆ふ

黒アゲハ彼岸花選び蜜を吸う

糸トンボ川の流れに身を任せ

沼の風涼し蓮の葉裏白く

モーテー音川鵜飛び立つ蓮の沼

あそこにもここにも蓄蓮の沼

うちわやんま道案内す蓮見舟

波しぶき舳先すれずれ川鵜飛ぶ

手賀沼の最果ての川船遊び

秋來ても渡らぬ白鳥群れゐたり

蘆原や新田拓く夢の跡

紫陽花や川幾筋も舟行す

炎天下沼風やさし蓮見船

船べりに触れなば落つる蓮の花

沼蔽ふ葉蔭に蓮華匂ひたつ

沼風に裏返る蓮葉遠白く

船寄せて咲き満つ蓮田我がものに

仲本興正

鳥肌のやうな水面や梅雨はげし
木下とふ駅の名たのし梅雨晴間
東大生の短パン雪駄秋の蝉
鉄塔を借景として船遊び